

大戦期科学研究の質的変遷： 20世紀史と真理概念の相互影響研究

私は現代哲学を専門とし、哲学的問題との関連から、科学の歴史を研究しています。「現実」の意味や「真理」の基盤は、歴史を通じて絶えず問い直され、ときに転換してきました。19世紀初頭以来、知識の形式は重要な変容を経験しました。この変容は、私たちの現代的な生活、あるいは「グローバル」な生活のありようを決定づける基盤となって、今日に続いています。人間の認識に関する問いがヨーロッパで大きく発展したとき、同時にそこでは政治的・経済産業的な変革の総体が、人々の暮らしの形と基本条件とを変えました。この変化はやがて国境を超えて拡大し、日本に住む私たちにとっても、それは私たちの歴史と呼ぶべきものとなったのです。私はこの歴史を、そこに並走しつつ互いに緊密に影響し合いながら進行した過程として、理論、テクノロジー、および人々の諸経験という、3つの道筋において辿りたいと考えています。

哲学研究—私たちにおける「人間性」とはどのようなものか

私は哲学を研究しています。特に私が専門としている領域は、方法論的にはヨーロッパに起源を持ちます。ですが今日では、私たちが直面するさまざまな問いや課題を、単に地域名で分類することはできません。そのため、私は自分の専門を「現代哲学」と称したいと思います。哲学的な問題意識から、私は19世紀から20世紀の生命科学の発展を研究しています。この歴史研究を通じて、私は哲学的な意味と日常的な水準の両方において、「人間性」とは何かを問うことを目指しています。

科学の転換と世界の変化

研究課題の「大戦期」の語は、第一次・第二次の両大戦を指します。したがって、私の研究は20世紀前半を主な対象とするものです。私はこの時期、「科学的であること」や、「真理」に対する私たちの態度を変える、一連の決定的な出来事が起こったと考えています。それらの出来事が生じる過程を跡づけながら、さらに別の出来事へと展開していく反響の関係性を探っていくこと、それが私の研究の中身になります。その探究を、特に科学と哲学の20世紀史を舞台に進めていきます。

20世紀が始まる世紀転換期に、人間にとっての生活空間は大きく変化することになりました。それは「世界がどのようなものでありうるのか」という可能性に関わる部分で、根本的にこれまでの人間のありようから離れるかのような、それを理解し記述するためには、まったく新しい言語や概



京都大学
文学研究科
特定准教授

田中 祐理子

Yuriko Tanaka

哲学

念が必要であるような変容の経験だったととらえられます。

まず一方では、数学と物理学の分野で、世界に関する人間の認識を根本的に揺るがすような、一連の理論的跳躍がありました。そこではカントールやゲーデル、アインシュタインやハイゼンベルクといった人々の提出した、新たな空間や論理の構想、人間の身体的感覚を超越する現実性の可能的なありかたが示されました。このとき以来、哲学はその新しい世界像にいかに応答するか問い続けています。

他方では、数々の実験的・技術的革新が起こり、やはり世界の形と人間の暮らしのありようを変えました。これらの革新は科学者と技術者、そして彼らに多様な形で影響を及ぼしていた産業的・政治的要因の力によって進められます。人々はそれまで不変である、不可能であると考えていたものが、必ずしもそのようであり続けるとは限らないと知ることになりました。この経験は、世界大戦というきわめて特殊な条件を与えられたとき、最も強烈な姿をとって人間の歴史に突き付けられるものとなりました。それ以来、哲学や人文科学の諸分野では、倫理や合理性を基礎づける新たな土台を探しています。

科学の歴史は、人間が世界を認識する方法を変えました。そして科学の歴史は、私たちが世界と関わる方法を変えました。つまりこの歴史を通じて、理論的にも物質的な意味においても、私たちが世界を理解するために用いる道具が変わったのです。私はこの変容の歴史を記述したいと考えています。

〈エピステモロジー〉と歴史研究

要約すると、「人間と世界の間を関係理解するために、科学

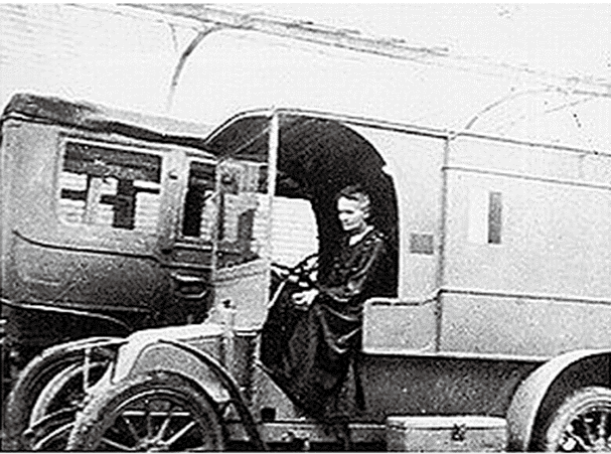
の歴史を追いかける」ことが私の研究の関心です。この関心を説明するために、私を先導してくれている水先案内人をご紹介します。ふたりのフランス人哲学者、ガストン・バシュラール(1884-1962)とジョルジュ・カンギレム(1904-1995)です。彼らはともに、フランス語で「エピステモロジー」と呼ばれます。

「エピステモロジー」が、私が自分の方法論を説明する際に使う用語です。エピステモロジーとは哲学の一部門であり、人間の知識・認識とは何か、特に20世紀以降は、科学的認識とは何かを問う学問です。これを「諸科学の哲学」と言い換えることも可能です。バシュラールは物理学の哲学と化学の哲学を研究し、カンギレムは医学と生物学の哲学を探究しました。

カンギレムの弟子である哲学者ミシェル・フーコーが、「カンギレムは科学史に重大な転換をもたらした」と書いたことがあります。フーコーは、それはカンギレムが「科学の発展によって生じる諸問題の論理的な重要性が、その科学によって到達された形式化の水準と必ずしも一致するものではないということ、よく理解していたからだ」と述べました。

フーコーは、バシュラールが物理学と化学について論じたその直後に、カンギレムが続いて医学と生物学を論じた

というこの流れ自体が、理由なく起こったものではないと述べたのでした。反対に、そこには重大な、哲学的な理由が存在します。その理由こそ、科学の展開から生じた「諸問題」の「理論的重要性」です。その理論的な問題を、私は物理学と化学と、そして生命科学との間のどこかに、突き止めなくてはならないと思っています。



第一次大戦の戦場でフランス軍兵士の救護に活躍したX線装置搭載車「ブティット・キュリー」に乗るマリー・キュリー

これまでの主な著作



参考文献

- ・ 田中祐理子『科学と表象—「病原菌」の歴史』名古屋大学出版会、2013年。
- ・ グザヴィエ・ロート『カンギレムと経験の統一性——判断することと行動すること 1926-1939年』法政大学出版会、2017年。
- ・ 『図録 特別展「人体—神秘への挑戦」』国立科学博物館、朝日新聞社、NHKプロモーション、2018年。